

Title	レオナルドの寺院構想
Sub Title	
Author	相内, 武千雄(Ainamu, Muchio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.3 (1930. 9) ,p.75(431)- 81a(437a)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300900-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

レオナルドの寺院構想

1 レオナルドと建築

レオナルド・ダ・ヴィンチの寺院構想を知るには、ガイミューラー (Heinrich von Geymüller) の貴を研究によるのが最も便利である(二)。彼は穹窿建築家としてのブラマンテ (Donato Bramante) の様式をレオナルドの様式に比較して、その特長を見出さうとしたのである。かくて、彼は一八六九年に於ける Codex Atlanticus 中のレオナルドの建築の素描の調査を始めとして、一八七六年以來 Institut de France, Palazzo Trivulzio, Lord Ashburnham, British Museum 等のレオナルドの手稿を調べることが出来、主として、パリ及び Codex Atlanticus の MS. B に基いて、建築家としてのレオナルドを明らかにしたのである。

レオナルドの建築に於ける活動については殆んど不明であり、又彼が實際に設計して建てられたといふ建物は一つも知られてゐない。然しながら、彼がミラーノに移つた時のロドヴィコ・イル・モーロ公に宛てた有名な自薦状の中に、我々は彼が建築家として決して人後に墮つることなき由の抱負が書かれてゐるのを知るのである。これによつて窺ふに、彼は建築に於ても亦アマトール以上であつた。ミラー

ノ時代、彼がミラーノ及びパヴィアの本山の建築に關係してゐたことは明らかである(三)。

レオナルドは彼の先進者、アルベルティ、フィラレテ、フランチェスコ・ディ・ジョルジオの例に倣つて、建築論を作り上げるつもりであつたらしい。彼の建築の研究は主として、素描と圖形であつて、之にノートを附してある。Zentralbau がその主要題目であつた。

2 Trattato della Cupola

レオナルドは Zentralbau の寺院形式としては如何なるものを與へ得るかといふ問題を總括的に提出して、この研究の結果を結局、"Trattato della Cupola" にまとめるつもりであつた。この問題は言葉に於けるよりも、圖面に於て遙かに多く說かれてゐる。MS. B は特に Cupola を一個或は數個もつ寺院のプランやエレヴェーションを多く包含し、その形式は想像し得る最も簡單なものから、最も複雑なものに及んでゐる。

これらの圖面は相互に連絡を辿ることが出来るが、然し、特別の目的に實施するためではなく、單に理論上の研究であつた。即ち、主なる Cupola と従なる Cupola との結合によつて生ずる様式上の關係や効果を研究したものである。全體として Zentralbau の要求するギリシア十字や圓形のプランが採用されてゐる。今、之をプランと彼に影響を及ぼしたる實際の建物とから分けて見れば、次の如くである。

a、圓形の基礎にたつもの。

b、正方形の基礎にたつもの。

この中には、ミラーノのサン・ロレンツォやブラマンテのサン・ピエトロのプランを憶はせるものがある (R-G. p. 56 fig 1; p. 51)

c、八邊形の基礎にたつもの。

この種のプランに範を與へたのは、ブルネレスコの設計になり、彼によつて僅かに約二十呎建てられたにすぎないフィレンツェのサンタ・マリア・デリ・アンデリの禮拜堂であらう。ブルネレスコのサント・スピリトのプランを寫し、その傍らに、この禮拜堂の一部を描いてゐる圖は、この推察を確めるものであらう (R-G. pl. 94. no. 3)。然し、そのプラン決して同一ではなく、ブラマンテのサンタ・マリア・ブレッソ・サン・サティロのサグレステア、フィレンツェの洗禮堂を憶はせるものである。

b、ミラーノのサン・ロレンツォに基くもの。

この寺の由來は不明である。或は四世紀に於ける建設とされ、或は異教時代の浴場であるといふ。何れにしても、三八五年頃には寺院にせられ、アンブロジウスの時代に創建されたものであらう。然るに、十六世紀になつて破壊されて再建された(一五七三年以後)。レオナルドの在世時代は未だその原形を失はず、穹窿建築の最も注目すべき作品であつた。既にゴシックの時代からその美しさ

を讀へられ、二個の副 Cupola を持つ其の形式は休むことなきレオナルドの注意を惹かなかつた筈はない。事實、若干の素描はこの寺から暗示されたことを示してゐる(R-G. pl. 87 no. 1. pl. 91 no. 1)。ブラマンテのサン・ピエトロの構想に於てもこの事實は認められる。

以上の他、フィレンツェの主要なる二つの Cupola、サンタ・マリア・デル・フィオーレと洗禮堂がフィレンツェ人としてのレオナルドに指導を與へたであらうし(R-G. pl. 88 no. 5, pl. 91 no. 1. pl. 92 no. 1)當時に於けるバヴィアの本山や(R-G. pl. 90 no. 2)コモの本山の建設、ミラーノのサンタ・マリア・デラ・グラツィエやミラーノの本山の中央塔の建設がレオナルドの研究に直接、刺戟を與へたものと思はれる。

3　ブラマンテとの關係

レオナルドがミラーノに赴いた時(一四八二年)は、既にブラマンテは此の地に多年居住し、彼の初期の作品、サンタ・マリア・プレツ・サン・サティロは既に在り、サンタ・マリア・デルラ・グラツィエに於ける建設はその後ちであつた。後年、サン・ピエトロの再建に携つて Zentralbau の偉大な師たることを證明したブラマンテとのミラーノに於ける十年、或はそれ以上の交際が、レオナルドの如き天才に何らの影響もなかつたとは考へられない。ブラマンテの名前はレオナルドの手稿中二個所(No. 1414, No. 1448)に出てくる。然し、この兩人の間にどれ程具體的影響があつたかは不明である。レオナルドのブラン

はその數學的理論的な發展に於て、全く獨特であつた。

4、レオナルドの様式

Zentralbau はバシリカ形式と並んで、初期以來使用された寺院様式である。然し、Cupola を中心として建物の他の部分が平均にまとめられるその形式は、クリスト教徒が寺院として要求する條件を滿すに適當でなかつた(三)。この形式は洗禮堂として最もよく使用され、又最もよくこれに適してゐた。紀元十一世紀、ビザの本山に於ける小規模な Cupola の擡頭はこの二つの寺院様式の最初の結合を意味してゐた。爾來、Cupola 建築は次第に發展し、サンタ・マリア・デル・フィオーレの Cupola の如き巨大な發現がみられたのである。然しながら、それは未だ Vierungskuppel としてあつて、Zentralkuppel としてではなかつた。ルネサンスに於ける新機運は當代の純藝術的な要求と相俟つて、漸次 Cupola 中心主義を發展さし、Zentralbau が時代の理想となつた。その試みはブルネレスコのサンタ・マリア・デリ・アンデェリ(一四三四)を始めとして、アルベルティのサン・セバスティアノ(一四五九)より、四百年代の末にはサンタ・マリア・デラ・パッショーネのコール(一四九〇)、カネバノヴァ・イン・パヴィア(一四九二)、サンタ・マリア・デルラ・クローチェ・イン・クレマ(一四九〇)等幾多の作例が見出される。ブラマンテがこの様式の完成者であつた。彼はミラーノ時代にサンタ・マリア・デルラ・グラツィエのコールに於て之を試み、ローマに來てからはテンピエット(一五〇二)に於て純化した形に表現した。この同じ企圖

を彼はサン・ピエトロの建設に於て最も複雑した形式を以て試みたのである(一五〇三年以後)。

これらの寺院形式には一貫したコンポジションの原理があつた。即ち、それ自身に於て獨立した完結せる空間形式を *Koordination* の關係に於て、中央のものを中心として、その周圍に平均に組合せるのであつた(四)。四邊形、八邊形、圓形等の簡単な幾何學的圖形がプランの基礎形式として使用され、さうして、可能なる場合には、ギリシア十字の形態が之に加はつた。かくの如くにして、一種の規則正しき “*Planornament*” が發生したのである(五)。*Raumempfinden* がその基礎的感情であつた。

レオナルドのプランも亦、四百年代のかういふ把握を免がれてゐない、却つて、その連結的なコンポジションの充分な發展がレオナルドに於て見出されるのである。然しながら、彼のコンポジションに於ける數學的な合理主義の特徴は全く獨特であつた(最もよき例 R-G. pl. 91 no. 2)。四邊形、八邊形、十二邊形、圓形等、正多角形の單純な空間形式から出發して、これらの圖形の主軸及び副軸に副室を法的に組合せて、考案し得らるゝ有らゆる *Zentralbau* を盡さねばならなかつた。

かういふコンポジションの方法は、その重心がロンバルディアにあるやうに思はれる。ロンバルディアの建築は既に中世から *Raumempfinden* が強く、フレンツェローマ派の量的感情に對してゐた。レオナルド自身、建築の研究に於ては全然、ロンバルディアの影響を受けてゐた。この事實は内部及び外部のエレヴェーションに於て一層よく窺ふことが出来る (R-G. pl. 84 no. 10, pl. 92 no. 1)。

註、

(一) J. P. Richter, The Literary Works of Leonardo da Vinci, London, 1883, vol. II.

(二) レオナルドのミラーノ滞在中に本山の穹窿(中央塔)を完成する議が強くなつて、多くの建築家が議を提出し、そのモデルを作るためにミラーノに招かれた。レオナルドもモデルを作つたのである(一四九〇年)。同年、彼はフランチェスコ・ディ・デヨルヂオについてパヴィアに赴いた。それはパヴィアの本山の建築の繼續について議を提するためであつた。

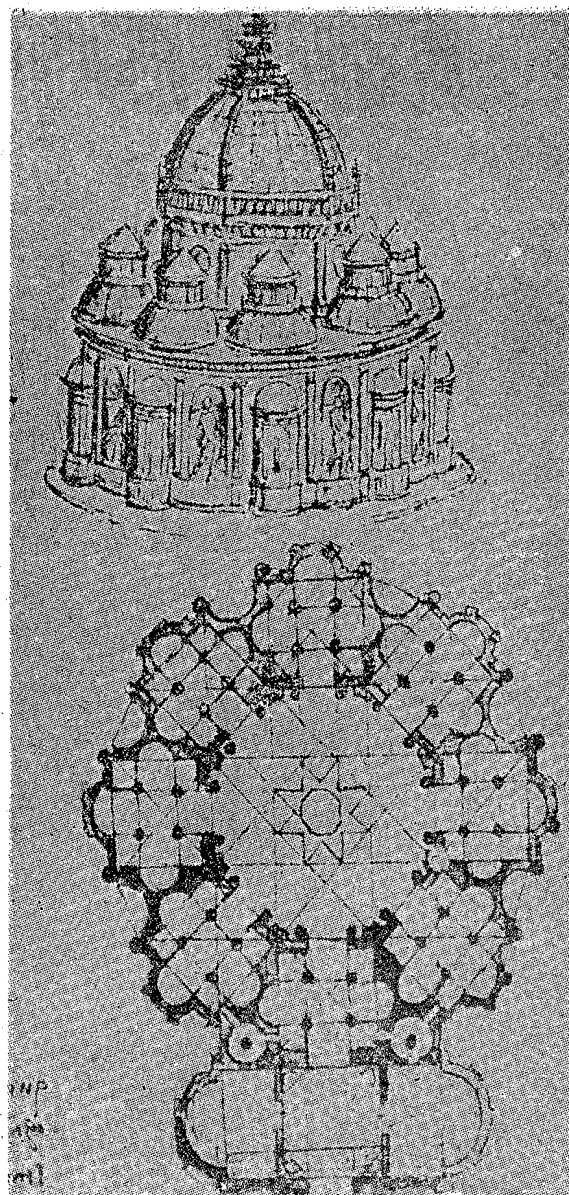
(三) 初期の寺院は、教徒を容れる場所としての Langhaus、祭壇のために堂内全體から見える位置としての後方のアプシス・僧侶のための特別の區域としての Querschiff を先づ第一に要求した。異教のバシリカの形式がかういふ實用的の要件に従つて變改され、祭壇が後方のアプシスに置かれる處から、“Längenperspektive” が寺院建築に於ける重要な原理であつた。それ故、遠心的配列の Zentralbau は寺院形式として適さなかつた。この二つの寺院様式の結合が寺院の勢力の發展した時期に於て初めてなされたことは注目に値する。

(四) Frankl の所謂 “Raumaddition” に屬する。Paul Frankl, Die Entwicklungsphasen der neueren Baukunst, S. 45

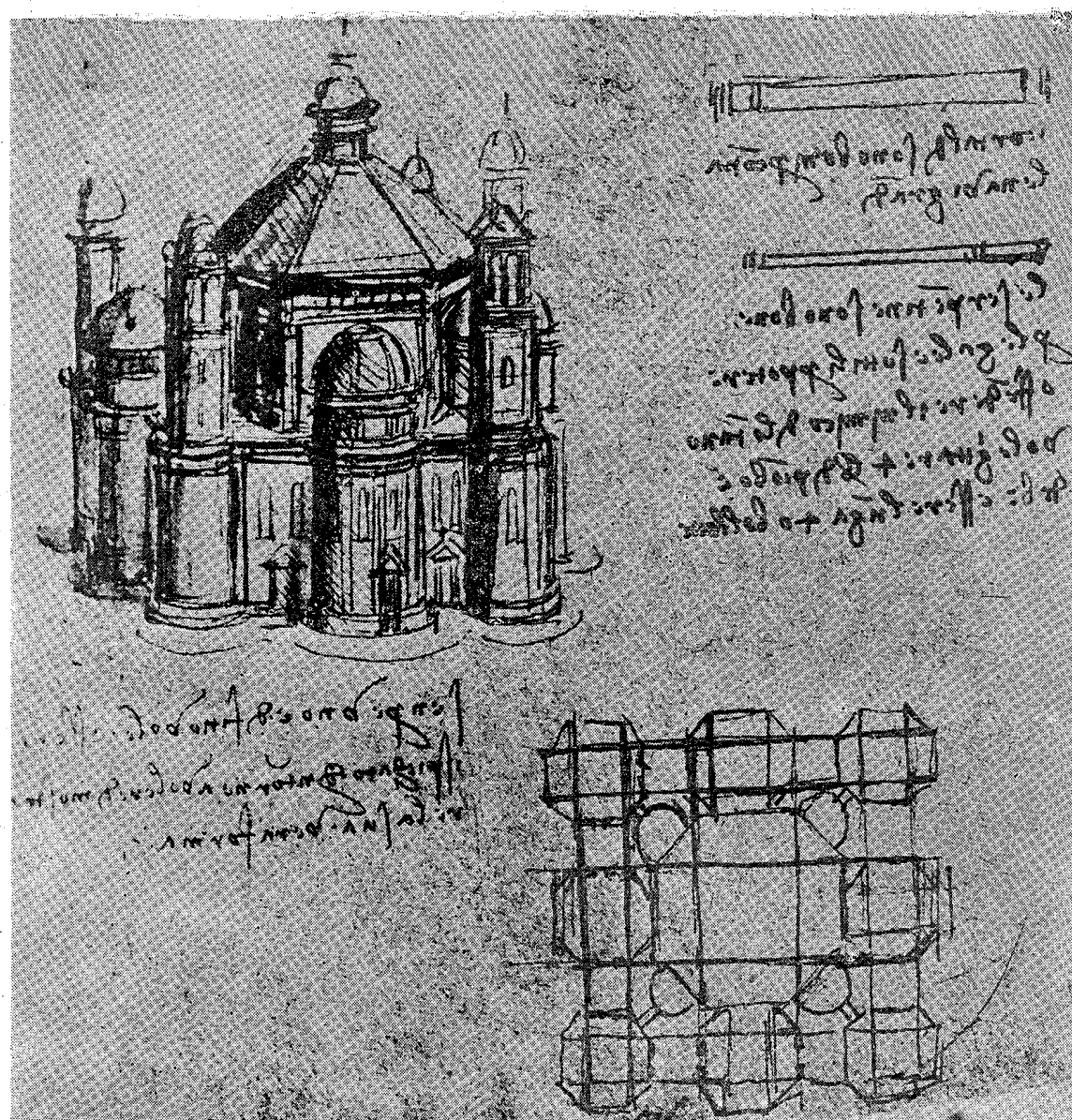
(五) Dag. Frey, Bramante Studien Bd. I. S. 75.

レオナルドのプランの様式については、P. Frankl, 及び Dag. Frey の研究を最も興味深くよみ、大體これに従つた。尙ほ、ブラマンテのサン・ピエトロのプランとレオナルドの圖面との關係については、拙稿「St. Pietro の Cupola」(美學研究第四號)を参照して頂ければ幸甚である。

相内武千雄



R-g 91 no 2 (MS. Ash. II 8^b)



R-g 92 no 1 (MS. B. 39^b)